S=G=クリャシュトルヌイ、Yu=A=ペトロシャン、S=S=ツェリニケル編

『アンドレイ=ニコラエヴィッチ=コノノフ教授満六〇歳記念チュルク学論文集』

護　雅夫

一

本書は、ソヴェト連邦の指導的チュルク学者・東洋学者で、ソ連科学アカデミー準会員・国立レニングラード大学東洋学部教授アンドレイ=ニコラエヴィッチ=コノノフ博士(Andrej Nikolaevič Kononov)の満六〇歳誕生日(一九六六年一〇月二七日)を祝賀し、かねて、その三五年間にわたる研究・教育活動を記念するため、ソ連の研究者を中心とするチュルク学者が寄稿し、S=G=クリャシュトルヌィが責任編修の上、同教授に献呈した論文集である。

まず、序文で、「学者・教育者、学問の組織者」としての同教授の功績を簡単に紹介し讃えたのち、一九三四年から一九六六年に至る同教授の出版業績の目録を掲げている。

本文は、㈠文法・語彙・方言学、㈡歴史学・文献学(フィロロギア)の二部に分かれる。いま、これに執筆したチュルク学者とその論文名とを列挙すると以下のごとくである。

㈠文法・語彙・方言学。(1)N=A=バスカコフ(モスクワ)「現代諸チュルク文語のシンタクスにおける若干の型態論的変化について」、(2)T=A=ボロフコヴァ(レニングラード)「Maḥmūd Kāshghari の《Diwānu lughāt-it-Turk》における唇音について」、(3)E=A=グルニナ(モスクワ)「トルコ語古代文献から見た -a/-e を用いる時称形」、(4)V=G=グーゼフ(レニングラード)「レニングラード写本《Melik Dānişmend 物語》における若干の書法的特殊性の音韻論的解釈試論」、(5)L=V=ドミトリエヴァ(レニングラード)「ソ連科学アカデミー=アジア諸民族研究所所蔵のチュルク言語学に関する諸資料」、(6)V=M=ジルムンスキー(レニングラード)「チュルク語諸方言の言語地理学の若干の問題について」、(7)I=V=コルムシン(レニングラード)「(トルコ語資料に基づける)動詞の使役法における文法的・語彙的研究」、(8)N=I=レチャギナ(レニングラード)「トゥーヴァ語における計量語について」、(9)E=N=ナジプ(モスクワ)「Qutbの《ホスローとシーリーン》とその言語」、(10)D=M=ナスィーロフ(レニングラード)「古代ウイグル語における-yük/-yuq を用いる過去形と現代チュルク諸語におけるその反映」、(11)Yu=ネーメト(ブダペシュト)「ロシア語単語《Karandaš》の起源」、(12)E=V=セヴォルチャン(モスクワ)「チュルク語の as, askïr., ast, asï そのほか」、(13)L=Yu=トゥグシェヴァ

（レニングラード）「チュルク諸語における語順について（問題提起によせて）」、(14)G＝ハザイ（ベルリン）「キリル文学で転写された一トルコ語テキスト」、(15)M＝Sシラリエフ（バクー）「（アゼバイジャン語諸方言資料に基づける）広母音を持つ一、二人称複数の接辞」、(16)A＝Dž＝シュキュロフ「アゼルバイジャン語における原型的副詞」、(17)A＝M＝シチェルバク（レニングラード）「長さから見たチュルク語諸母音」。

㈡歴史学・文献学。(1)S＝M＝アブラムゾン（レニングラード）「キルギズ種族史から」、(2)G＝F＝ブラゴヴァ（モスクワ）「ロシアにおけるバーブルーナーメ研究史によせて」、(3)S＝I＝ヴァインシュテイン・M＝V＝クリュコフ（モスクワ）「古代チュルク族の外観について」、(4)A＝D＝グラーチ（レニングラード）「古代チュルク時代の編年的および種族・文化的境界」、(5)A＝ザヨンチコフスキー（ワルシャワ）「チュルク族に関する最古のアラブの諸ハディース（八―一一世紀）」、(6)S＝G＝クリャシュトルヌィ（レニングラード）「Tonyuquq は阿史徳元珍である」、(7)L＝R＝クィズラソフ（モスクワ）「古代チュルク語諸碑文に見えるbalbalという術語の意味について」、(8)M＝S＝ミハイロフ（モスクワ）「セルゲイ＝エセーニンとナーズィム＝ヒクメト」、(9)A＝D＝ノヴィチェフ（レニングラード）「セリム三世の改革の準備」、(10)Yu＝A＝ペトロシャン（レニングラード）「青年トルコ人運動のイデオロギーの研究によせて」、(11)N＝V＝ピグレフスカヤ（レニングラード）「ふたたびシリアーチュルク語の一文書について」、(12)L＝P＝ポタポフ（レニングラード）「tele という種族名とアルターエッ」、(13)G＝V＝ソロコウモフスカヤ（レニングラード）「R＝ハリードとA＝P＝チェーホフ」、(14)I＝V＝ステブレヴァ（モスクワ）「アラブ―ペルシアの韻律論とチュルク語の韻文」、(15)A＝S＝トヴェリティノヴァ（モスクワ）「トルコ語諸文書の出版における、歴史的用語としてのアラビア語単語 barāyā' の解釈について」、(16)E＝R＝テニシェフ（モスクワ）「アルタイの古代チュルク語碑銘」、(17)N＝トドロフ（ソフィア）「一九世紀中葉のブルガリア地域における一群の都市住民の年齢構成について」（フランス語）。

ここで、これらの論文すべてに触れる余裕はない。いまはただ㈡歴史学・文献学のうち、目下わたしが興味を抱いている問題に関するものとして、(1)・(3)・(4)・(6)・(7)・(9)・(10)・(12)・(16)、――この九論文の内容を簡単に紹介するにとどめることを諒とされたい。

二

(1)「キルギズ種族史から」。キルギズ種族の諸グループ中で最古のものの一つとされている dëëlës（tëëlës）グループは、イッシクークル東南岸地域のDžety-Oguzskij 区、その西南、天山北麓の At-Bašinskij 区、さらにその西南、Andižan

の東南に当るÖsskaya州のYangi-Naukatskij区・Üč-Kurganskij区など、たがいに遠く離れた地域に分散している。筆者アブラムゾンは、本論文で、一九五三、一九五五年に、キルギズ考古学・民族学調査団の民族学班が、Džety-Oguzskij区のAngëstën村（一九五三）、Yangi-Naukatskij区のTolman村（一九五五）の古老から聞き書きした、それぞれのdëëlës グループの祖先伝承を紹介して、それらのモティーフが類似していることから、今日では相互に隔離して居住するこれらdëëlës両グループが、古くは系譜的関係を有していたこと、イッシクークル沿岸のdëëlës グループが、一八世紀の中ごろに南方から移住したものの子孫であることなどを推定している。しかも、この南部キルギズのdëëlës たちの言うところでは、その祖先は今日の東トルキスタンの南部地域から移つてきたものであるという。さらに、アブラムゾンは、これらdëëlës両グループの祖先伝承に共通する、動物（この場合は馬群）の守護霊、動物そのものだけでなくその頭部・毛・血液その他にも含まれる呪力のモティーフに触れ、このような前イスラム時代の信仰の痕跡が、キルギズの旧い世界観に関してほかの諸資料の伝えるところと完全に符合することを指摘してこの論文を終えている。これと若干関連するものとして、(12)があげられるであろう。

(12)「teleという種族名とアルターエツ」。筆者ボタポフは、まず、『隋書』・『唐書』などに見える鉄勒をTeleの音訳と考えて、その名称がかれらの自称で、鉄勒が薛延陀・韋紇・回紇・拔野古・同羅・阿拔・思結・多覽葛・契苾・渾・斛薛・都波・骨利幹などからなる遊牧部族連合であつたことをのべたのちに、中国史料に拠りつつ鉄勒の動きを概観したのち、ほぼつぎのようにいう。アルターエツ――とくに南部の――の中のTelengitまたはTelengut, Teleut, Telesは、いずれもTeleの複数形である。のみならず、サヤン・アルタイ高地の諸族名中に、Tele〔鉄勒〕[1]部族連合を構成した部族名、Ujgur〔回紇〕・Dubo (Tubo)〔都波〕・Dolan'ge〔都覽葛〕・Kibi〔契苾〕・Aba〔阿波〕が残つている。そこでまず、南部アルターエツについて言うと、例えばそのうちでもつとも多数の「骨」（氏族）の一つTeleutのMundus「骨」の始祖伝承、今日のキルギズの分族名その他を検討すると、Mundus「骨」とTelesとの間に血縁関係の存在したことが推定される。つぎに北部アルターエツに関して言えば、トゥバラルのYaryk「骨」がもともとチュリシュマン地域から移住したTelesの一部であると伝えられ、またYaryk「骨」とTelesとの通婚が最近まで禁止されていたことなどから考えると、Yaryk「骨」はTelesに出自したものといえる。これと同じことは、トゥバラルのČigat (Čagat)「骨」についても指摘されうる。というのは、この「骨」もまたチュリ

シュマンの Teles から分かれてトゥバラルのもとへ移住したものとされているからである。そして、この Čigat という名称は、突厥碑文に見える Čik の複数形にほかならぬ。これに関連して注目されるのは、アルターエツのうちの Teleut, Telengit に Tërt-as〔四姓アス〕と D'eti-as〔七姓アス〕、「アルタイ-キジ〔アルタイ人〕」に Bajlagas という「骨」名があることで、これらに見える As とは、突厥碑文に、Čik とならんで現われる Az である。そして、上掲の「四姓アス」「七姓アス」のように氏族名に数詞の付せられているのが「九姓テレ〔鉄勒〕」におけると同じ現象であり、また、G=N=ポターニンが Džity-as (D'eti-as) は「Teles の本当の名称」を示すとしるしているのから、As 諸族が起源的に Tele、とくに Teles と関係を持つことは明らかである。現在の南部アルターエツの D'ettitas (Titas)・Teles 両「骨」間の通婚の禁止は、これらのあいだに古く存在した血縁関係の反映と見なさるべきである。さらに、レベディ川流域のチェルカーネツ中の Šaksalyg「骨」の始祖伝承、Čalkanyg「骨」における長老の葬送に関するシャマニズムの伝承などは、チェルカーネツがイェニセイ-クィルグィズの領域、ミヌシンスク盆地から今日のレベディ川流域へ移住したものであることを示す。しかも、この Šaksalyg「骨」と Teles「骨」との通婚が禁止され、前者が後者を karyndaš（同じ子宮から生まれたもの）と呼んでいたことから、この両「骨」間における血縁関係の存在が推定される。それだけでなく、チェルカーネツは、最近に至るまで結婚にさいして seol'ti と呼ぶ一時的住居を建てたが、この名称は、アルターエツのうち Teles 以外には存在せぬ。こうした慣習および名称は、Šaksalyg「骨」のものが Teles からレベディ川流域へ持ちこんだものである。そしてさらに、最近では、チェルカーネツは、トゥバラルやショーレツ同様、北部アルターエツに特徴的な履物を用いるが、それはかれらに固有のものではなく、かれらが以前使っていたのは、南部アルターエツに特有の履物であつた。これによつても、チェルカーネツの北方への移動があとづけられる。ポタポフは大体以上のようにのべて、要するに、いままでの叙述によつて、「大部分の南部アルターエツの古い種族的基盤をなしたのがチュルク語を用いる Tele〔鉄勒〕諸部族で、また、南部アルターエツ——北部アルターエツの一部——のもつとも近い歴史的祖先だつたのが Telengit, Teleut, Teles だつたことが明らかになる」という。

三

とくに考古学的調査の成果と文献史学的研究のそれとの総合を試みたものとして、(3)・(4)・(7)がある。

(3)「古代チュルク族の外観について」。筆者ヴァインシュ

テインとクリュコフとは、まず、トゥーヴァ、アルタイ、蒙古、西トルキスタン[2]その他から発掘された古代チュルク族の古人類学的資料――とくに頭蓋骨――の研究結果に拠つて、東方（トゥーヴァ、ザバイカルおよび蒙古草原）の古代チュルク族にはモンゴロイド的人種型が優勢であるが、西方、トゥーヴァ、アルタイ、カザフスタン東部を含む地域ではユーロペオイド型との混血が目立ち、そのもつとも西方領域（東ヨーロッパ草原に至る）ではユーロペオイド型の混入が非常に多くなることを指摘する。そして、このように、古代チュルク族の人種型が単一でないのは、阿氏那氏を中核とした古代チュルク族の複合的な種族史の反映であること、突厥可汗国時代における古代チュルク族の人種型が基本的にはモンゴロイドで、かれらのトゥーヴァへの浸透期（六―七世紀）に、この地域でのモンゴロイド的要素の比重が増大したことをのべ、こうした事実は、トゥーヴァ、アルタイ、蒙古に残る、古代チュルク族の死者を表現したと思われる石人の研究成果とも合致すると言う。ついで、筆者は、同じく石人の容貌から見て、古人チュルク族が口ひげ・顎ひげをたくわえていたことがわかるとし、問題を古代チュルク族の髪型に移す。周書突厥伝などでは、突厥のそれが「被髪」であつたと伝えられているが、ソヴェトの学界では、これを「辮髪」とする説（例えばクィズラソフ）と、「両肩にそつて伸ばされた長い髪」とするもの（例えばグラーチ、アルタモノフ）とがある。筆者は、崔東壁や劉茂才などが「被髪」に与えた解釈、アルメニア史料そのほかに拠つて、「被髪」とは「辮髪」を含む概念で、古代チュルク族の髪型は「辮髪」であつたと考え、このことは、セミレチエ、トゥーヴァ発見の石人の髪型によつても証明されると主張する。古代チュルク族のかぶりものについて伝える文献史料は存在せぬが、筆者は、それは、これまた石人のかぶりものから明らかであるとして、これに関するエフチュホーヴァの認――四種類に分ける――を紹介したのち、衣服の衽（おくみ・えり）の重ね方を問題にする。ソヴェトでは、往々、ビチューリンの誤訳にまどわされて、中国史料にいわゆる「左衽」を、「右の衽の上へ左の衽を重ねること」つまり「右前」とする解釈が行なわれているが、筆者はその誤りを正して「左衽」とは「左前」を意味し、これまた、多くの石人の衣服からもわかると言う。さらに、石人・丸石などに刻まれた線画・遺物などから、衣服の裁ち方、履物、革帯、それに付された板金・留金、帯に吊るされた小袋・サーベル・短剣の類、黄金・銀・青銅製の耳輪（男女ともに用いた）、武器などの形状その他を考察して、飾金具つきの帯が内陸アジア[3]から西アジア・東ヨーッパ草原に至る遊牧民にひろく用いられていたこと、耳輪もまた、古代チュルク族の支配期に、北部カフカスに達するユーラシア大

陸の遊牧民の間に広布していたことを指摘し、最後に、「上に検討してきた諸問題、とりわけ髪型と衣服の重ね方とに関する諸問題は、多数の図像学的資料の鑑定に当つて重要な意義を持ち、かつ、古代チュルク族の外観の重要な種族的特色をはつきり示すものである」と結論する。

(4)「古代チュルク時代の編年的および種族-文化的境界」。

筆者グラーチは、まず、「古代チュルク時代」という概念は、たんに突厥可汗国時代（五五二―七四五）だけでなく、ウイグル可汗国時代（七四五―八四〇）、さらにイェニセイークィルグィズ時代をも含み、この種族配置が根本的変化を蒙つたのは、契丹＝遼帝国の建設（九一六）による、と考える。つまり、かれによれば、古代チュルク時代の編年的境界は、六世紀から一〇世紀の第一・四半世紀までの間なのである。というのは、この期間に、広大な地域にわたるさまざまのチュルク語諸族において、古代チュルクールーン文字碑文、埋葬方式――何よりも先ず七世紀初頭から広布し出した馬を伴なう埋葬――をはじめ、物質文化――武器・日常生活用具・馬具・装飾品・容器の形式――の共通的特徴が現われ存続したからである。ところで、古代チュルク諸国家は、一時的できわめて脆い軍事・行政的連合に過ぎなかつたという説があるが、これは、最近の考古学的調査の成果と文献による研究結果とを総合的に検討すると誤りである。何故ならば、㈠古代チュルク時代の諸国家が少なくとも百年以上の間存続し、㈡トゥーヴァ、蒙古、ハカッシャ〔南シベリア〕、南部アルタイ、カザフスタン、西トルキスタンなど広大な地域にわたる埋葬コンプレクスの研究によつて、諸可汗国を構成したのが大きくて比較的安定した種族的諸集団だつたことが証明されるからである。筆者は、こうのべて、種族配置の細分化は、主としてモンゴル帝国の形成・発展にさいして起つた歴史的諸事件の結果であろうと推定する。ついでグラーチは、歴史・考古学的研究成果を総括して、古代チュルク時代における人種・文化圏（ゾーナ）を以下のように大別する。㈠内陸アジア、西トルキスタンのチュルク諸可汗国を構成した諸部族圏（蒙古、トゥーヴァ、アルタイ、カザフスタン、東トルキスタン、一連の西トルキスタン地域）、㈡古代クィルグィズ（黠戛斯）国家を構成した諸部族圏（ミヌシンスク盆地、ただし八四〇年以後一〇世紀初頭までは蒙古、トゥーヴァ、アルタイ）、㈢骨利幹連合を構成した諸部族圏（バイカル湖沿岸地域）、――これらである。このような歴史文化圏を設定する規準は、一連の物質文化的要素を別にすると、埋葬方式であるが、筆者は、上掲の㈠に属する突厥可汗国を構成した内陸アジア諸部族に特徴的なものとして、つぎのような編年的ヴァリエーション、埋葬方式のタイプをあげる。(a)七世紀の第一・四半世紀を含めてそれまで行なわれた火葬による埋葬で、環状遺構中

に入れられ、墳墓の傍の囲いの中に追悼のための石柱が立てられている。(b)七―八世紀における馬を伴なう土葬で、人間の頭位は東、馬の頭位は西である。(c)八―九世紀の、同じく馬を伴なう土葬で、人間の頭位は北または西北、馬の頭位は南である。(d)九―一〇世紀に行なわれた馬を伴なわぬ土葬で、被葬者の頭位は北あるいは西北である。つぎに、上述の㈡の古代イェニセイ―クィルグィズでは火葬で、その遺灰を一年後に埋葬地へ移して地表に置くとともに浅い墓壙に入れ、ついでクルガンを造営した。ただし、小児は土葬だつた。このように、埋葬方式は、一般的には、或る歴史―文化圏に特徴的であるが、必らずしもそうではない埋葬遺跡も存在する。この現象は、当時の政治情勢ないし種族的移動から説明される。例えば、先に掲げた㈢のミヌシンスク盆地内に、その地域に通常の火葬ではなく、土葬――普通には馬を伴なう――が発見されているが、これは、イェニセイ―クィルグィズがサヤン山脈の彼方の突厥に服属していた時代のものである。これに対して、㈠に属する、サヤン山脈の南、タンヌオーラの南に、㈢のイェニセイ―クィルグィズに特徴的な火葬方式が認められるが、これは、イェニセイ―クィルグィズの南方発展――ウイグル可汗国の滅亡（八四〇）をもたらした――を反映している。これに続いてグラーチは、種族の分布を考えるのに重要な資料として、古代チュルクの石人をとりあげる。何となれば、それらの分布領域が突厥可汗国の政治的境界と一致する、換言すれば、石人――「屈服させた強敵の姿を表現した」――を建てる風習が、この政治連合、突厥を構成した諸部族間に存在したからである。こうして、例えば、石人の分布の調査によつて、トゥーヴァの北部諸区が八四〇年までは黠戛斯の領土内に含まれていなかつたこと、従つてサヤン山脈――トゥーヴァの北辺に横たわる――が政治的・種族的境界だつたこと、しかし、トゥーヴァとアルタイとの間のチハチェヴァ山脈・シャプシャリスキー山脈はそうした境界ではなく、古代チュルク時代にはトゥーヴァの種族とアルタイのそれとの間に血縁関係が存在したこと、そして、トゥーヴァの南、蒙古との国境ぞいのタンヌオーラもまた種族的境界ではなかつたことが明らかになつたと言う。さらに筆者は、蒙古およびトゥーヴァの山地草原地域からカザフスタン、東トルキスタン、西トルキスタンに伸びる文化的、またしばしば見られる種族的脈絡の糸を明らかにするのは考古学的資料、とくに岩壁彫刻であるが、これは、比較的最近まで種族発生（エトノゲネス）問題の研究材料とされなかつたことを指摘し、最後に、文献史料・考古学的資料から考えて、古代チュルク時代におけるさまざまの歴史―文化圏の遊牧民の間に、きわめて顕著な、同時に独特の形の財産的・社会的分化が見られ、また、おそらく、採鉱労働と鉱道敷設労働とには奴隷（十中

八九、捕虜）が用いられたらしいことを推定している。要するに、筆者グラーチによれば、六世紀から一〇世紀の第一・四半世紀までを含み、内陸アジア、南シベリア、カザフスタン、西トルキスタンに強大な遊牧諸国家が存在した古代チュルク時代は、チュルク語諸民族史上、重要な種族的諸連合――その多くは今日の多くの民族（トゥヴィーネツ、アルターエツ、ハカース、カザーフ、キルギズその他）の祖先となるに至った――の形成期だったのである。

グラーチは、上に一言したとおり、古代チュルクの石人を「屈服させた強敵の姿を表現したもの」と見ているが、つぎに紹介する(7)では、これと対立する見解が提出されている。

(7)「古代チュルク語諸碑文に見える balbal という術語の意味について」。キュル=テギン、ビルゲ=カガン、アルプ=エレトミシュ（オンギン河畔発見）諸碑文そのほかに balbal という語が見えるが、これは、N=I=ヴェセロフスキー以来、古代チュルクの石人（石婦）を示すとされてきた。しかし、これに対して、V=L=コトヴィッチは、balbal は、全然加工されぬ小石柱または板石――追悼遺跡の傍に、殺された敵兵の数だけ列立された――だけを意味すると考えた。本論文の筆者クィズラソフは、このコトヴィッチ説を発展させ、かつて発表した見解をも含めてほぼ以下のように説く。今日知られている文献・銘文から考えても、考古学的・民族学的研究の成果からしても、古代チュルクの石人は追悼儀礼と関連して、「かれら自身の死んだ英雄を表現したもの」であり――従ってグラーチの言うような「屈服させた強敵の姿を表現したもの」でなく――、また、それら「古代チュルク族における死者の石像は、その被葬者を追悼するさいかれに代るものとされ、追悼の酒宴に『参加する』死者の一霊魂の『いれもの』として用いられたに違いない」のである。そして、こうした石人のどれにも、それが balbal であることを示す銘文は見られぬ。ところが、ビルゲ=カガン、アルプ=エレトミシュ両碑文の傍に立つ未加工の石に、それらが balbal であることがしるされている。従って、balbal とは、敵の姿を現わした石像ではなく、ただ、「殺された敵を象徴した」、これといった加工の施されぬ石にすぎず、このことは、古代チュルク語諸碑文の叙述からも、また、「〔死者が〕かつて一人を殺さば一石を立つ。〔その数が〕千、百に至るものあり」という隋書突厥伝の記事などからも明らかである。

ところで、突厥文字碑文・墓誌・銘文は、上掲諸論文で言及されたいわゆるオルホン、オンギン碑文などのほかに、周知のように、イェニセイ川上流域からも多数発見されているが、最近数年間に、山地アルタイ地域の各地からも、小断片ながら見出され、その数は一二片に達している。そのうちの七片を、K=セイダクマトフの手に成る模写から翻訳し、註

釈を付したのが、(16)である。

(16)「アルタイの古代チュルク語碑銘」。筆者テニシェフは、本論文で、いまのべたように、アルタイ地域から発見された突厥文字・古代チュルク語碑銘のうち、チャルィシュスコエ碑銘三片、ビイスク博物館所蔵碑銘一片、カラーコル発見碑銘三片に訳註をつけているが、ここでその内容を紹介する違はない。いまはただ、アルタイ地域の古代チュルクールーン文字が、その下手な書体からして、何よりもまずタラス発見の銘文のそれを思わせ、オルホン諸碑文などとは違つて未加工の石に刻まれ、また刻文の技術もキュル=テギン、トニュク、または黙延啜碑文におけるほどすぐれていないこと、そして、それらの内容も、歴史というよりは日常生活の叙述に近くて、事件や主人公の功業はしるされず、従つて主人公の名前もまれにしか現われぬこと、さらに、これらが、文字・言語の特徴から見てほぼ六―八世紀に編年されうることだけをのべるにとどめておく。

さきに触れたいわゆる突厥碑文と中国史料とを比較研究したものとして(6)「Tonyuquq は阿史徳元珍である」があるが、この論文の内容は、わたしがかつて「ユス=ゲー=クリャシュトルヌイの突厥史研究」(4)の五六〇―五六五頁で紹介したところとほとんど変らぬので、ここでは省略することにしたい。

四

最後に、オスマン帝国史関係の論文、(9)・(10)の内容を簡単に見ておく。

(9)「セリム三世の改革の準備」。オスマン帝国のスルタン―セリム三世（在位一七八九―一八〇七）は、露土戦争（一七八七―一七九一）に敗れると、その宿願であつた改革の準備にとりかかり、大宰相 Koca Yusuf-efendi に命じて、高官たちから国家の現状およびその改革手段についての意見書（lâyiha）を提出させた。その結果、トルコ人高官二〇人、スウェーデン人軍事顧問一人、アルメニア人ムスリム一人、合計二二人の lâyiha が出された。本論文の筆者ノヴィチェフは、まず、ルーメリアのカズアスケル Tatarcik Abdulla-efendi、デフテルダール（財務長官）Şerif Mehmed-efendi (paşa) の lâyiha の内容を要約し、前者が旧体制の維持を主張したのに対して、後者が、その持つあらゆる限界にもかかわらず、進歩的性格を帯びていたことを指摘したのち、しかし、これら lâyiha の提出者たちがヨーロッパ諸国の経済生活・行政機構・軍隊制度その他に関してまつたく無知だつたため、かれらの提案は、セリム三世とその支持者たちにとつてはほとんど役に立たなかつたと言い、改革事業にとりこれらにましてはるかに大きな意義を有したものとして、Ebu Bekir Ratib-efendi がスルタンに提出した報告書をあげ、大

体つぎのようにのべる。セリム三世は、一七九一年八月四日にオーストリアと講和条約を締結するとただちに Ratib-efendi を団長とする全権使節団をウィーンへ派遣したが、この使節団は、表むきの外交的任務の達成もさることながら、オーストリアの行政機構・財政制度・軍隊（他の諸国のそれをも含めて）そのほかの調査を主要な使命としていた。Ratib-efendi は、セリムが皇太子のころからその信任を得、外務省に勤めてヨーロッパ諸国の生活に通じ、ルソー、ヴォルテール、モンテスキューなどの思想にも接していた。かれを団長とする使節団はオーストリアに二二七日間滞在したが、その帰国後、Ratib-efendi は五〇〇ページから成る報告書、Sefaret-name（使節の書）をスルタンに出し、その中で、オーストリア、プロシア、フランス、ロシアの軍隊組織、士官養成制度、オーストリアの行政・租税体系、銀行、税関、採鉱事業などについてしるしている。のみならず、かれは、一国が強大たりうるには、組織化・訓練のゆきとどいた軍隊、充実した国庫、経験に富み忠実な官僚を要するというヨーロッパ諸国の政治家・学者の意見を引用し、さらに、同じくヨーロッパ諸国で保障されている民衆の自由などを強調している。かれほど広く、また好意的にヨーロッパの実態を紹介し、その拠つて立つ基盤がトルコのそれをはるかに凌駕している所以を明らかにしたトルコ人は、かれ以前には存在しなかつた。ノヴィチェフが結論的に言うところに従えば、大宰相がスルタンの命をうけ、この Sefaret-name そのほかに基づいて立案した総合的な改革計画は「諸資料には残されていない。しかし、デフテルダール Mehmed-paşa の lâyiha、とりわけ Ratib-efendi の Sefaret-name のような顕著な意見書が出現するに至つたこと自体、オスマン帝国内部に、新らしい思潮が現われはじめたことを示すものにほかならぬ」のである。

⑽「青年トルコ人運動のイデオロギーの研究によせて」。筆者ペトロシャンは、本論文で、一九世紀末―二〇世紀初頭における青年トルコ人運動の指導者・イデオローグたちの唱導したパン―オスマン主義（Osmanlılık）をとりあげ、その源流・本質・運命について、ほぼ以下のように説く。政治思想としてのパン―オスマン主義は、一九世紀の六〇―七〇年代に成立したが、その基本的内容を最初にはつきりと定義づけたのは、青年トルコ人の思想的先駆者「新オスマン人〔Yeni Osmanlılar〕」であつた。すなわち、その指導者、Midhat-paşa, Namık Kemal, Ziya-paşa は、各種出版物の中で、多民族国家、「共通の祖国」――オスマン帝国――の領域内に居住するすべての民族の統一・連合というイデーをとなえ出したのである。ただし、「王朝を基礎とするオスマン主義（Hanedana müstenit Osmanlılık）」という思想はすでに一

六―一八世紀に存在し、スルタンの全臣民は「オスマン人」と称されていたから、「新オスマン人」のパン―オスマン主義は、帝国内の諸民族の解放運動の激化に対処するため、古い革袋に新らしい酒を盛つたものといえる。こうして、「新オスマン人」は、立憲性が確立されて国家の改革が実現された暁には、民族的・宗教的闘争は終熄し、「オスマン共同体(ümmet-i osmaniye)」のわく内における、帝国内の全民族の統一が可能であると主張したのである。しかし、時とともに、「オスマン共同体」の語に代つて「オスマン国民」「オスマン民族」(Osmanlı milleti) の語がますますひんぱんに用いられ、スルタンに対する議会の返書などのような公文書にも見られるに至つた。一八七七年、議会の開会にさいして、一トルコ人高官は、『タイムズ』誌の特派員に、「これらすべての議員は、全体として、オスマン人である。今日以後、かれらはムスリムでも、ギリシア人でも、アルメニア人でもない」と語つている。一九世紀の九〇年代に、「統一・進歩協会」の活発な宣伝活動が開始されたとき、パン―オスマン主義は、青年トルコ人の、民族問題に関する基本綱領となり、その宣伝において、「オスマン人同邦(osmanlı vatandaşlar)」の語が定着することになつた。一九世紀末―二〇世紀初頭における政治思想としてのパン―オスマン主義の内容は、とくに、青年トルコ人のもつとも著名な出版物の一つ『共同体会議(Şura-yi Ümmet)』誌にはつきり現われている。例えば、その一九〇二年四月一〇日号には、独立の保障、帝国の不可分性、外国の干渉の排除、立憲制の確立その他が主張されているとともに、「さまざまのオスマン分子(osmanlı anasır-ı muhtelife) の衷心からの合同――愛国的感情から生まれる――を実現し、ムスリムたると非ムスリムたるとを問わず、全オスマン臣民の、政治的諸問題に関する意見の統一に全力をつくす」べき必要がのべられている。青年トルコ人運動のイデオローグたちの中に、帝国内の諸民族間にこうしたいわば牧歌的な「共通の祖国感情」を醸し出しうると本気に信じた理想主義者がいたことは考えられる。しかし、パン―オスマン主義の宣伝において決定的な役割を果したのは、このようなユートピア的な「共通の愛国感情」を明々白々たる政治目的から鼓吹しようとする、青年トルコ人指導者たちの意識的努力だつた。というのは、青年トルコ人のパン―オスマン主義は、まず第一に、帝国内の非トルコ諸民族の解放運動に対して向けられたものであり、と同時に、青年トルコ人運動の推進者たちの中には、経済力に富む非トルコ民族ブルジョアジーとの同盟が、アブデュル―ハミト二世の封建的絶対体制との闘争で勝利を獲るために焦眉の急であることを自覚していたものもいたからである。青年トルコ人は、一九〇一―一九〇二年になつてはじめて、スルタンの専制政治に対し

て立ち上つた帝国内諸民族の政治勢力を組織化・糾合する方策をとり出した。ついで、一九〇六―一九〇七年になると、政治的立場・民族構成から見てさまざまのブルジョア的革命的諸組織の合同会議――それは一九〇七年にパリで青年トルコ人の手で設立された――の準備との関連において、パン―オスマン主義の宣伝はとくに活発化した。一九〇六―一九〇七年に、パリの青年トルコ人の中心と、諸民族のブルジョア的革命的諸組織および個々の活動家との間に交換された書簡の一通は、青年トルコ人の活動の目的が「すべての同邦――トルコ人・クルド人・ブルガリア人・アラブ人・アルメニア人その他――の平等を保障し、かれらの間に祖国の喜びも苦しみも分かち合つて、その協同を獲ちとる点にある」ことを明言している。しかしながら、帝国内の非トルコ諸民族の解放運動を、二〇世紀の初頭という時点において、「共通の愛国感情」というような空疎な美辞麗句によつて、「スルタン専制体制との共同闘争」の軌道に乗せることは不可能だつた。数世紀にわたるトルコ人支配からの解放を願う諸民族の完全に平等な政治的権利、文化的発展に対する明白な保障が、最少限、必要だつたからである。それなのに、まさにその青年トルコ人運動の指導者たちの出版物――例えば『オスマン人（Osmanlı）』誌――に、「愛国感情の統一」を主張する論文とならんで、鎧の袖の見えたショーヴィニズム的思想――トルコ人の優越性を唱える――を強調するものもひそかに現われてきていた。現代トルコの歴史家シェリフ＝マルディンは、この時期の青年トルコ人はトルコ民族の役割・意義を強調したけれども、そこには非トルコ諸民族に対する侮蔑感は見られず、かれらはただ、オスマン帝国の建設に当つてトルコ民族の果した歴史的役割を認めるべきことをのべたに過ぎぬと言い、青年トルコ人のそうした主張と、「統一・進歩党」のその後のショーヴィニズムとは同一視さるべきではないとしるしている。しかし、青年トルコ人運動の指導者たちが、パン―オスマン主義を、まさしく非トルコ諸民族の解放運動との闘争における武器として利用しようとしたことを示す多くの例から考えると、このマルディン説はさほど説得的でない。こうして、青年トルコ人運動のイデオローグたちは、帝国内の非トルコ諸民族に、その解放運動の停止を呼びかけ、かれらの宣伝活動には、非トルコ諸民族は、解放運動の停止によつてのみ「統一・進歩協会」の諸委員会に参加する権利を持ちうるという思想が認められる。例えば、パリの青年トルコ人の中心からブルガリアにいる一活動家にあてられた書簡にはつぎのように見える。「もし、或るアルメニア人がやつて来て、『自分はオスマン人である。自分はオスマン主義に忠誠を誓い、諸君の綱領のわく内においてオスマン主義のために働らく用意がある』と言うならば、ムスリム、ト

ルコ民族に固有の寛容で歓待好きな性格は、このアルメニア人を同邦と呼び、かれを『ようこそ！』と歓迎することを要求するだろう。我々が、我々のオスマン社会へ非ムスリムたちを入れるとすれば、それは、ただこの条件が守られる場合においてのみである。我々の社会は、まぎれもないトルコ人社会である（Cemiyetimiz halis bir Türk cemiyetidir）。我々の社会は、ムスリムおよびトルコ人に敵対するものの思想には服しないであろう」と。連合・統一のためのこれに類する諸条件が、非トルコ諸民族の民族感情を傷つけるものでしかなかつた以上、この種の宣伝が非トルコ諸民族のブルジョア的-革命的諸勢力をその運動に糾合しえなかつたのは当然であつた。だからといつてしかし、たとえ、青年トルコ人が、立憲制の確立後あらゆる民族の無条件的な平等・連合が保障されるであろうことを口を酸つぱくして宣伝したとしても、そうした宣伝は、いまや二〇世紀の初頭にあたつては、帝国内の非トルコ民族大衆を捉えることはできなかつたであろう。青年トルコ人のパン-オスマン主義的なイデオローグたちは、帝国内の非トルコ諸民族が、その社会的・民族的成長の結果、民族独立運動を展開するのはもはや避けられぬ事態に立ち至つているという、きわめて重要な歴史的現実に対する配慮をまつたく欠いていたのである。ただここで、このころトルコ民族主義・パン-チュルク主義を唱導しはじめていたトルコの未成熟なブルジョア的インテリゲンツィアが、もちろんかれら自身の立場からではあるが、青年トルコ人運動の指導層のパン-オスマン主義的思想を批判していることに注目しておく必要がある。例えば、パン-チュルク主義の有名なイデオローグ Yusuf Akçura は、一九〇三年、「帝国内のさまざまの民族を連合させて、かれらに基礎を置く一つの国家を建設するのは不可能である」と書いている。全体としていうなら、パン-オスマン主義の宣伝は、大した政治的効果をもたらさなかつた。青年トルコ人と非トルコ民族のブルジョア的-革命的諸組織との連合（一九〇七）を促進したのは、パン-オスマン主義の「共通の祖国」「共通の愛国感情」というイデーの普及よりはむしろ、一九〇七年までに、帝国内に形成されてきていた政治情勢の特殊な諸条件だつたのである。青年トルコ人は、一九〇八年の革命以後の経験からパン-オスマン主義の幻想を放棄せざるをえなくなり、「統一・進歩党」の指導者たちは、公然たるショーヴィニズムの道をとるに至つた。こうして、すでに一九一一年の同党中央委員会の決議には、「非トルコ諸民族には、それらに独自の民族的組織を認めてはならぬ。（中略）、トルコ語を普及させることは、ムスリムの支配を確立し、異民族分子を同化させるための絶好の手段である」と明言されている。本論文の筆者ペトロシャンは、青年トルコ人運動のイデオロギーとしてのパ

ン=オスマン主義の流れを大体以上のように辿ったのち、「数世紀にわたつて抑圧されてきた帝国内のさまざまの非トルコ民族の間における民族解放思想・志向の急激な成長という具体的諸条件下にあつて、パン=オスマン主義の諸イデーは、ユートピア的であるだけにまたそれだけ反動的であつた。現実においては、それらのイデーは、封建的=教権的反動勢力との闘争にさいし、この多民族国家のブルジョア的革命的諸勢力のすべてを結集させるのを妨げたに過ぎなかつたのである」と言つて論文を結んでいる。

以上、本書の収録する三四篇の論文から、自分の興味のおもむくところ、わずか九篇だけに触れたにとどまり、わたしは、これによつて、ソヴェトにおけるチュルク学の一端――それこそ文字通り一端――さえも紹介しえたなどというつもりはさらさらない。わたしは、数年前、レニングラードに滞在中、二カ月ばかり、コノノフ教授のトニュクク碑文に関する講義の末席に列し、日本のチュルク学の成果について数回話す機会を与えられた。この短文の執筆中、わたしの眼前には、当時のコノノフ教授の温顔がつねに彷彿としていた。わたしにとつては、このような紹介の筆をとるのが同教授の満六〇歳誕生日を祝うためになしうる精一杯のことである。同教授の健康と、研究・教育における活躍を心から祈つて、この無雑な一文の筆を擱く。

註

(1) 以下、〔 〕で囲んだのは、護の補足である。

(2) 原語は Srednyaya Aziya. 我国で、この語は往々「中央アジア」と訳されるが、ソヴェトでは、中央アジアの諸共和国のうち、カザフ=ソヴェト社会主義共和国をのぞく、ウズベク、タジク、トゥルクメニア、キルギズの四社会主義共和国の地域を指す。本文では一応「西トルキスタン」と訳しておく。

(3) 原語は Central'naya Aziya. ソヴェトでは、東トルキスタン以東の内陸アジアを示す。

(4) 拙著『古代トルコ民族史研究 I』、山川出版社、昭和四二年、五五七―五八九頁。

(S.G. Klyaštornyj, Yu. A. Petrosyan i S.S. Cel'niker, red., Tyurkologičeskij Sbornik k šestidesyatiletiyu Andreya Nikolaevića Kononova, Moskva, 1966. 276 s.)

訂正

坂野正高「メリー・ライト教授小伝」(五十三巻一号)

頁一一二、上段、一五行　新書→新著

〃　〃　二一行　主任図書→主任司書

一一四、下段、五行　*ucsoaun→ucmopuu*